

【本陣等々力家再生・活用事業】 事業に至る背景



■本陣等々力家の概要

■ 本陣等々力家（ほんじんとどろきけ）

江戸時代に松本城主が力の狩猟や鮭漁に訪れた際の休憩場として利用され、「本陣」と呼ばれました。18c初頭には等々力村を含め計11村をまとめる組手代の役割を担った。現在の屋敷内には主な建物として長屋門、主屋、座敷、裏座敷の他に5棟の蔵が残ります。

■ 市指定文化財「等々力家の長屋門」

屋敷構え北正面の長屋門は切妻造の平屋造で、東西方向に長さは約33m。昭和13年に罹災した際に西端部を約9m撤去したと伝わっており、一時期は全長約43mの規模でした。道路側に見える出格子窓は明治時代の造作で、これにより外観から華やかな印象を受けます。昭和54年、旧穂高町が文化財に指定しました（現在市指定文化財）。



庭園から見た座敷



長屋門から前庭を望む



主屋（カミオエ）



庭園（主屋から離れへの園路）



前庭（枯山水）

■ 屋敷構えの中核と庭園

長屋門をくぐると枯山水の前庭が広がり、さらに進むと主屋、座敷、文庫倉が続きます。主屋と座敷の縁側からは水の流れのある庭園（現在は止水）を望むことができます。この庭園には松や百日紅、市の天然記念物（昭和45年指定）で樹齢400年前後と伝わる幹回り2.93mのビャクシンなどが植えられています。文庫倉は屋敷構えの一番奥の南端に位置し、大切なものを収納する場でした。文庫倉と座敷は趣のある太鼓橋で連結されており、文庫倉を折り返し地点のようにして、裏座敷へと続きます。一個人の住宅で二つの座敷棟を有する例は珍しく、座敷と裏座敷の間の空間は中庭です。裏座敷を除き、これらの長屋門・主屋・座敷・文庫倉の建築年は18c末か19c初期ごろとされ、水の流れる庭園を含めた景観は、本陣等々力家の中核をなし、藩主が来訪した最上層民家の姿を今に伝える重要な資料です。

【本陣等々力家再生・活用事業】 事業に至る背景

■事業実施に至る背景

